

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 178号

平成29年2月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (10)

10月1日

天よ、耳を傾けよ、わたしは語る、地よ、わたしの口の言葉を聞け。わたしの教えは雨のように降りそそぎ、わたしの言葉は露のようにしたたるであろう。若草の上に降る小雨のように、青草の上にくだる夕立のように。(申命記 32・1-2)

静謐 (せいひつ) は天然にあり。神の造りし天然にあり。静謐は聖書にあり。神の伝えし聖書にあり。一輪のおだまきの、露に浸されてその首 (こうべ) をたるるあれば、一節の聖語の、わが心中の苦悶をなだむるあり。怒濤四辺に暴 (あ) るる時に、われは草花に慰癒を求め、旧き聖書に世の供し得ざる安静を探る。

10月4日

各自は、召されたままの状態にとどまっているべきである。召されたとき奴隷であっても、それを気にしないがよい。しかし、もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。主にあって召された奴隷は、主によって自由人とされた者であり、また、召された自由人はキリストの奴隷なのである。あなた方は代価を払って買い取られたのだ。人の奴隷となつてはいけない。兄弟たちよ。各自は、その召されたままの状態、神のみ前にいるべきである。(コリント第1書7・20-24)

すなわち各人その職にとどまるべし。しいてこれを転ぜんとするなかれ。ただ「神と共にあるべし」とのことである。これはいかにも宿命節のように聞こえるが、決してそうではない。この世の何たるかを知りて、これに処するの道を示したる言である。この世は理想のおこなわれがたき所、不公平はその特徴である。ゆえに、あえて運命の発展を求めない。…そして彼が我をあらわしたもう時を待つ。彼は時にはわれをこの世においてあらわしたもう。その場合には「むしろこれを受くべし」である。されども彼は彼の聖国(みくに)において必ず我をあらわしもう。われ、その事を思うて、あえてこの世においてあらわれんことを欲しない。われはこの世においてはわが置かれし地位に満足する。この世においては、神を知り彼と共にあるだけで充分である。その他の事は来世まで待つ。キリストが現れて、われをわが定められし地位に置きたもう時まで待つ。

10月8日

あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です。

(詩篇 119・105)

灯火親しむべき秋がきて、第一に読むべき書は聖書である。聖書を読んで、永久の利益がある。聖書を読んで人は老いて老いない。彼の心に永久の春がある。聖書を読んで、理想が尽きない。詩と歌と音楽とはその必然の結果として、わが口より流れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きない。もし世に神の言があるならば聖書を措(お)いてほかにあるとは思えない。人類の所有のうちで最も貴いものは書籍であって、書籍のうちで最も貴いものは聖書である。

10月9日

一緒に食卓につかれたとき、パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。すると、み姿が見えなくなった。彼らは互いに言った、「道々お話しになった時、また聖書を解き明かしてくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」。(ルカ伝 24・30-32)

聖書を究むるは嘉し。されども、おのれみずから神の聖書たるはさらに嘉し。聖書は過去における神の行動の記録なり。われをして現在における神の行動の実証たらしめよ。われをして聖書の生ける注釈たらしめよ。すなわち贖罪、表義、救拯の目的物たるを得て、「ゆるされたる罪びと」の好標本たらしめよ。われは聖書学者たるの野心を断たるも、神の恩恵の受器たるを得て、小なる善きクリスチャンたらんことを欲す。

10月10日

よく聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに1か年滞在し、商売をして、ひともうけしよう」と言う者たちよ。あなたがたはあすのこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちはどんなものであるか。あなた方はしばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧に過ぎない。むしろ、あなたがたは「主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事も事しましょう」というべきである。(ヤコブ書4・13-15)

キリスト信者は目的なき者なり。みずから一の目的を定め、万障を排し、終生一徹、その目的点に達せんと努むるがごときは、余の不信仰時代の行為なりき。主の命これ従い、今日は今日の業をなす、これ余の今日の生涯なり。余に計画なるものあることなし。なんと、あわれむべき（うらやむべき）生涯ならずや。

10月15日

新しき歌を主にむかって歌え。主はくすしきみわざをなされたからである。その右の手と聖なる腕とは、おのれのために勝利を得られた。(詩篇 98. 1-2)

日本的キリスト教というのは、日本に特別なるキリスト教ではない。日本的キリスト教とは、日本人が、外国の仲人を経ずして、直ちに神より受けたるキリスト教である。その何たるかは一目瞭然である。この意味において、ドイツ的キリスト教がある。英国的キリスト教がある。蘇国的キリスト教がある。米国的キリスト教がある。そうしてまたこの意味において、日本的キリスト教がなくてはならない。しかり、すでに有るのである。「人の内に靈魂のあるなり。全能者の息、これに悟りを与う。」(ヨブ記 32・8) とある。日本魂が全能者の息に触れるところに、そこに日本的キリスト教がある。このキリスト教は自由である。独立である。独創的である。生産的である。まことの基督教はすべて、かくあらねばならない。日本的キリスト教のみ、よく日本と日本人とを救うことができる。

10月16日

あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、「わたしには何の楽しみもない」というようにならない前に、また日や光や月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。(伝道の書 12・1-2)

世に恥ずかしきこととて、時間にゆとりを与えざりしがゆえに汽車に乗りおくれし場合の如きはない。少し早く家を出れば、この恥を取らずして済んだのである。そうして、あに、ただ汽車のみならんや。人生全体がしかりである。死の間際まで、これを向かうの準備をなさずして、急いで準備に取り掛かるも、よし全然無効ならずとも、不完全なるはまぬかれない。「なんじの若き日に、汝の造り主を覚えよ」とあるはこれがためである。死の準備に十分のゆとりあらんためである。多く遊んで急に働かんとするがゆえに急ぐのである。常に少しずつ働いて、泰然としてすべての責任に応ずることができる。人生は長くして短し。おのが使命を果たすには充分である。されども、使命以外の事をなさんと欲して、生命が100あっても足りない。おのが使命を自覚して、ゆったりとしたる、充実せる生涯を送ることができる。

10月22日

あなたはたしかに彼に聞き、彼にあつて教えられて、イエスにある真理をそのまま学んだはずである。すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅びゆく古き人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて、真と義と聖とを備えた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。(エペソ書4・21-24)

キリスト教はいかに見ても道理の宗教である。人に良心があり、彼が罪を犯す間は、キリスト教の必要はやまない。キリスト教が供する罪の許しの道がなくして、人に真個の平安はありえない。神が、罪びとを義として、自ら義たりたもう道は、キリスト教を除いて他にありえない。科学と合致しうるや否やの問題ではない。良心を満足しうるや否やの問題である。良心の起源をいかに説明しようとも、良心は良心にして、人はその命令を拒むことはできない。良心をして鋭敏ならしむれば、人は何びとといえどもキリストに至るはずである。そして私もまたこの道を取って。彼を信ずべく余儀なくせられたのである。宇宙の大道が、人をキリストに追いやりつつある。哲学者カントのいわゆる「頭上の星と胸中の道德律」とが、人をしてキリスト信者たらしむるに十分である。道德の終る所が宗教であつて、宗教の終るところが、キリストの十字架の道なるキリスト教である。私はこの経路を踏んでキリスト信者になったのである。

10月23日

神よ、わが心は定まりました。わが心は定まりました。私は歌い、かつほめたたえます。わが魂よ、さめよ。立琴よ、琴よ、さめよ。私はしののめを呼びさします。主よ、わたしはもろもろの民の中であなたに感謝し、もろもろの国の中であなたをほめたたえます。あなたのいつくしみは大きく、天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及ぶ。神よ、みずからを天よりも高くし、みさかえを全地の上にあげてください。(詩篇 108・1-5)

教会の信条(ドグマ)としての教義はこれを受けない。しかしながら信仰の実験の証明としての教義はこれを唱える。余輩は無教会信者であればとて教義を無視しない。外より課せらるる教義(信条)は絶対的にこれを拒否するも、内なる実験の表明としての教義はこれを唱道せざるを得ない。

教会の要求する儀式はこれを認めない。しかしながら罪の世に対する信仰発表の機会としての儀式は、進んでこれを実行する。余輩は無教会信者であればとて絶対的に儀式を無視しない。余輩は教会の洗礼、晩餐式等に救霊の能力(ちから)があるとは信じない。しかしながら余輩がキリストの弟子たることを世に向かって発表せんがためには、余輩は適當の形式を挙げる。儀式としての儀式は、これを軽んじ、これを拒否するも、確信発表の機会としての儀式は、これを重んじ、励行する。

10月25日

いと高き者の下にある隠れ場に住む人、全能者の陰に宿る人は主に言うであろう、「わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神」と。主はあなたを狩人の罠と、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。そのまことは大盾、また小盾である。(詩篇 91・1-4)

病は肉体の病である。ゆえに精神の静養である。病によってわれらは静養を余儀なくせらるるのである。この点から見ても、病は確かに大いなる恩恵である。健康の時は言うまでもなく労働の時である。われら、神のしもべに取りては、健康の時は「わが時」ではない。神と同胞の時である。ゆえにわれらは、自己について考えることだって少なく、朝起きてより夜眠るまで、他人のことについてのみ思わねばならぬ地位に立つ者である。しかるに一朝病に撃たれて床に付するや、われはわが責任より免(ゆる)さるるのである。この時、わが時はわがものとなり、われは自己について考え、わが神と特に親しく交わるに至る。足立たず、手動かず、咽喉(のど)鳴らざる時に、わが休息の時は至る。人は病後の静養を語る。されどもわが静養は病中に行われる。病癒えてのちに、われらは立ちて直ちにわが業につく。「静養のための病」、キリストのしもべの病とはかくのごときものである。

10月31日

料理がしらは、ぶどう酒になった水を眺めてみたが、それがどこから来たのか知らなかったの、(水をくんだ僕たちは知っていた)花婿を呼んでいった、「どんな人でも、初めによいぶどう酒を出して、酔いがまわったころわるいを出すものだ。それなのに、あなたはよいぶどう酒を今まで取っておかれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行い、その栄光を現された。そして弟子たちはイエスを信じた。(ヨハネ伝2・9-11)

たいていの人の生涯は悲劇でも、喜劇でもなく、平々淡々水の如き生涯である。これに詩もなければ歌もない。ただ働いて生くるのみである。まことに無味淡白の生涯であって、時には生くるのかいなきもののごとく思われる。されども一たびイエスのこれに臨みたもうや、水のごとき生涯は化してぶどう酒のごとき生涯となるのである。日常の労働に深き意味が加わるのである。つまらないものがおもしろくなるのである。べつに人にほめられるにあらざれども、また政府または社会または教会に価値を認めらるるにあらざれども、生きていること、その事が幸福なることとなるのである。そしてイエスのみがこの奇跡をおこないたもうのである。イエスに会いまつりて、農夫は田園にありて満足し、商人は店頭にありて満足し、工人は工場にありて満足するに至るのである。淡味なる平民の生涯に意味と興味とを加うる点においてイエスの感化力は独特である。